艦載機 J-15 はどこにいる？

漢和防務評論 20140730（抄訳）

阿部信行

（訳者コメント）

中国空母”遼寧”に載せる艦載機 J-15 は、未だ大量生産には入っていないようです。 漢和防務評論によると、推測される理由は、現在試験飛行中の機体に問題点が見つかり、機体の改修が必要なこと。第二は、空軍の J-11 などにも共通の AL-31F エンジンが不足していること、です。もし J-15 の生産が順調でエンジンの数に問題がなく、艦載機パイロットの養成が順調に行けば、早ければ 2015 年末、遅くとも 2016 年には空母”遼寧”は艦載機 24 機で組織的訓練ができると予測しています。 国産空母の就役ははるか先の 2020 年ごろになるようです。

KDR 香港特電：

2012 年 11 月から 2013 年 10 月までの瀋陽航空機工場の衛星写真を見比べると、この 1 年間に艦載機 J-15 はたった 1 機しか発見できなかった。同時期に生産されたその他の機体はクローン型スホーイ戦闘機が 8 機であった。この分析結果は、本誌の地上観察によっても証明された。すなわち J-15 は 2013 年には未だ量産に入っていない。これは不思議なことなのか。本誌が今まで発見したのは 6 機の J-15（551 号から 556 号機）と 1 機の複座型 J-15S である。J-15S は試験飛行中であり、座席はタンデム式、ロシアに類似の型式はない。

SU-33UB 型は、並列座席で、瀋陽航空機会社は未だこの型式を生産したことはない。見るところ中国の設計者が自らの考えで行ったようだ。もし SU-33UB を真似ようとすれば胴体の大がかりな再設計が必要になる。旧ソ連のスホーイ航空機会社でも SU-33UB の再設計に約 5 年かかった。したがってスピードを優先したため、J-15 の胴体を基礎に複座練習機を設計したのだ。実際上は、それほど容易ではない。J-15S と J-11BS ではエアロダイナミックス理念が多少異なる。前者は、SU-30MKI/MKM の設計に近く、小型の全動式カナード翼を取付け、航空機の低速性能を高め、特に艦載機としての適合性を図っている。そのほか、中、低空での空戦中、速やかに高迎え角状態にすることが出来る。早期の SU-35（単座）はカナード翼を採用していた。その後取り消した理由は、ステルス性向上のためである。このほか、SU-35 はさらに大推力のスラスト・ベクター・エンジン及び全動式尾翼を、またフルオーソリティ・デジタル・フライトコントロール・システムを採用しカナード翼を取り外した不利点を多少補

った。SU-35 は、パリ及びモスクワ航空ショーでデモ飛行を行った。デモ飛行では瞬時に 90 度の迎え角状態に入れた。中国の航空専門家が言う 70 度ではない。
したがって J-15S が誕生した後、もし中国空軍が機動性をさらに向上させた J-11 或いは J-16 シリーズを必要とするならば、空軍版の J-15S や多用途戦闘機の J-16 に J-15S のエアロダイナミックスを採用することによって、空戦時の機動性をさらに向上させることが可能になる。
なぜこの 1 年間、瀋陽航空機会社は J-15 を量産しなかったのか？作戦上、空母“遼寧”は少なくとも 24 機の J-15 が必要だ。可能性がある理由として、第一、現役の J-15 はさらに設計上改修が必要であること、したがって今後生産される J-15 は、現在試験飛行中に発見された問題点を改善する必要があること。
第二の理由として、KDR がすでに説明したのでここでは簡単に述べるが、AL-31F 型エンジンを搭載した J-15 を大量に生産すると、現役の J-11、SU-27SK/UBK 戦闘機の予備エンジンが不足すること、がある。このほか部品生産が追い付かないこと。これは、中国航空工業体制の持病とも言える。もし順調に行って、空母“遼寧”に載せる 24 機の J-15 が揃ったとしても、それでも 2 年前後の期間が必要だ。KDR が慎重に評価したところでは、2015 年末、或いは 2016 年にならないと、空母“遼寧”は飛行連隊全体が揃って飛行訓練を行う態勢にはならない。慎重に評価するもう一つの理由は、パイロットの訓練である。艦載機パイロットの養成は相当難しい。シミュレーターの訓練では、甲板の揺れや海風の影響を模擬出来ず、したがって初期段階では、J-15 よりも練習機 J-15S の生産の方がより重要である。この点は、空軍パイロットの養成とは相当異なる。最初の中国国産空母が完成するまで少なくとも 5 年はかかる。さらに海上試験等の要素を考慮すると、全面就役は少なくとも 2020 年以降であろう。したがって J-15 全体の生産が緩慢であろうとも、国産空母の就役時期には間に合うのであろう。

以上